

創設の時代 1919（大正8）年～1928（昭和3）年

興望館は、1919（大正8）年5月に、日本基督教婦人矯風会外人部関東部会のボールス夫人やミス・イザベル・ブラックモアなど北米出身の婦人宣教師などにより、東京市本所区松倉町2丁目62、63番地（現東駒形四丁目、横川小学校前）に開設されました。

当時の日本は、1918（大正7）年に米騒動が起きるなど、民衆の生活困窮が極限の状況にあり、都市の生活問題も深刻でした。東京府下の生活状況についても、生活困窮者は30,744戸129,455人（全体の3.67%）で、その多くは主に深川、小石川、下谷、本所、四谷、浅草等の区に居住しているとされ、本所菊川町付近では二畳に凡そ10人で暮らしているというところもありました。家賃は、工場地の付近で一戸平均3円余、その他は2円50銭位、一日の収入は平均50銭内外で、母と子が父の手助けをして家計を支えているという状況でした。また、その日常生活を見ると、着るものもあまり持っておらず、衛生的にも恵まれない状態でした。これが都市の細民地区に住む人々の生活状態で、その地名の中には、本所区内の横川町、菊川町、松倉町などが含まれており、同区松倉町に興望館を開設したのは、このような社会的背景がありました。

設立当初は、本所区内の空き地を借り、仮小屋にごぎを敷いて、近隣の貧しい子ども達を集めて幼稚園を始めるという素朴で簡易な活動でしたが、1920（大正9）年春には借家を借り受け、事業の拡大を図りました。1922（大正11）年に内務省、東京府、本所区から寄付を受け、託児所、勉強室、裁縫室、診療所等を完備した新館の建設に着工しました。新館の完成が間近となった1923（大正12）年4月、大きな暴風雨により建物が崩壊しましたが、本所区長などが資金集めに協力し、8月31日に新館が完成しました。ところが、翌9月1日に関東大震災に遭い新館は全焼。復興のための財政援助をカナダメソジスト宣教師社団に求め、東京府より木材の下付を受け、バラックを建築し、12月から興望館託児所を開始しました。この頃の興望館の活動は、ブラックモア氏の所属していたカナダメソジスト教会本部からの援助に支えられていました。

定着の時代 1928（昭和3）年～1938（昭和13）年

1928（昭和3）年4月本所区松倉町から南葛飾郡寺島町2195（現京島一丁目）に移転し、新たに興望館セツルメントを開始することになりました。本所区は、関東大震災で95%の建物が焼失しましたが、この寺島町は地震による建物の全壊442戸、半壊427戸だけで、火災は免れたのでした。このため、当時の寺島町は震災後の好影響を受けて発展を遂げ、商工業地として人口密集地となりました。人口密集の原因は、この地区は水運の便がよく、地価も安く工場建設地区としての条件を備えていたため、墨東一帯が工業地帯に転換していきました。一方、当時の日本は資本主義の危機的状況が深まり、労働者への賃金不払、切り下げ、解雇が続出し失業問題が深刻であった時期で、これらの工場の76%は従業員が5人以下の零細企業であったことから、その皺寄せをまともに受けたのが零細企業の労働者でした。

興望館は、この地域に移転し、1929（昭和4）年9月には木造二階建ての本館を完成させ、セツルメントとして保育園、少年少女部、健康相談、婦人授産部など地域住民の生活改善に取り組みました。

戦争の時代 1939（昭和14）年～1945（昭和20）年

1941（昭和16）年4月、創設以来興望館の経営を担ってきた日本基督教婦人矯風会外人部関東部会が解散し、興望館の経営が日本人理事に移譲されました。これは、戦時体制下で欧米外国人が敵国人と見なされ、外人部の会員が本土に引き上げざるを得なかったためです。これまでの興望館の経営は、外人部からの寄付などによって支えられており、これにより財政がより一層困難になるのは確実でした。

1943（昭和18）年7月に厚生大臣に申請し、財団法人として認可されましたが、その申請の趣旨は、資産を確保するためでした。

興望館では、1930（昭和5）年の夏以来毎年キャンプを実施し、保育園、少年少女部、男女青年部などの行事として定着していましたが、一方、自前のキャンプ地を手に入れることが、今後の転住保育所計画促進のために必要でした。常設転住所として選定されたのは、長野県軽井沢の敷地と建物で、1940（昭和15）年5月に常設転住保育施設として開設され、その年の夏から「杳掛学荘（くっかけがくそう）」という名称で利用されました。

乳幼児保育は、定員150名であったものが、1942（昭和17）年4月より「戦時体制下銃後家族」を支えるため、定員200名に増員しました。1943（昭和18）年2月には、軍需工場で働く家庭の乳幼児を一般家庭より優先して入所させるよう通知があり、1944（昭和19）4月から定員250名に増員しました。また、7月1日から、軍需工場で働く家庭や軍人遺族で保育を必要とする乳幼児を対象に、戦時託児所を開設しました。

1944（昭和19）年3月、本土空襲が現実のものとなり、都市住民の地方への疎開が閣議決定され、国民学校初等科の児童の縁故疎開が指示されました。興望館でも、3月末から第一次強制疎開として縁故疎開のできない母子、幼児、学童を優先に「杳掛学荘疎開の家」を開設し受け入れました。1945（昭和20）年3月10日の東京大空襲では、寺島町付近も大半が焦土化し、死者、負傷者、罹災者が多数出ましたが、幸い興望館は災いを免れ、戦時託児所を休止して、残留孤児を疎開の家に収容することにしました。また、8月1日付で富ヶ丘疎開保育所が東京都の委託施設として指定され、疎開幼児の保育が実施されました。

再建の時代 1945（昭和20）年頃

1945（昭和20）年8月15日、日本は敗戦し、国民は戦時体制から解放されました。興望館の建物は戦禍を免れましたが、向島区はたび重なる空襲で、全体の57%を焼失し、罹災戸数11,660戸、死者1,639名、負傷者12,213名、罹災者27,133名を出していました。

興望館でも、1945（昭和20）年10月ごろには杳掛学荘より寺島の本部に職員も戻り、最初に取り組んだのは診療所や産院の開設、保育園の再スタートでした。また、杳掛学荘に残された戦災孤児の養育も現実的問題として残り、それに巷にあふれた戦災孤児、引揚孤児などが社会問題となり、彼らの保護へも取り組むことになりました。

セツルメントとは

セツルメントとは、社会事業家が労働者居住区に定住し、住民との人格的なかかわりを持って、物質的、精神的な困窮に対応すると共に、住民が本来もつ力を引き出して生活向上を図っていく社会事業の手法です。労働者居住地区における貧困状況に対応する有効な社会事業形態として、英国や米国において発達したセツルメントが日本に紹介され、大正中期から昭和初期にかけて、東京、大阪、神戸等の都市の下町に次々と誕生しました。

当時の墨田区には、興望館セツルメントをはじめ、東京帝国大学セツルメントや共励館など10を超えるセツルメントがあり、児童を対象とする保育や学童クラブ、キャンプ、青年への余暇指導や夜学、失業者や困窮者を対象とする職業紹介や授産、生活相談、診療等の事業が行われていました。